

(続紙 1)

京都大学	博士 ( 教育学 )	氏名	淀 直子
論文題目	分離性と身体像から捉える自己の生成とプレイセラピー －自閉症スペクトラムを中心に－		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、自閉症スペクトラムの問題を抱える子どもを中心として、自己の生成とはどのようなプロセスで行われるものであるか、またプレイセラピーはそれにどのように寄与できるのかという問いに対して、心理臨床学的観点から論じたものである。プレイセラピーは、セラピストとのかかわりによって、プレイ空間が心の空間となって内的なものが象徴的に表現される。それによって、心の世界が変容してくることをめざすのである。自閉症スペクトラムの子どもたちは、象徴形成が困難という問題を抱えている。象徴形成は、その意味づける主体である自己と、もとの事象である象徴されるものと、象徴との分化が前提となる。自己と対象の分化、そしてそれらが全体像として把握されていることが必要である。この全体像は身体像と換言できると考える。そこで本論文では、象徴形成の前提であり基盤である分離性と身体像の観点から彼らの状態像を捉え、心の発達や自己の生成に寄与するプレイセラピーとはどのようなものであるかを追究し、論じることを第一の目的としている。また自閉症スペクトラムの子どもたちは、人との情緒的なつながりを基盤にすることが困難であるため、外界の表層をよりどころとして生きていると考えられる。そうすると、自閉症スペクトラムではない子どもにおいても、このような在り方をする場合があるとしたら、どのようなことであるか。そこからどのように心的世界が生成されうるかについて探求することも重要な観点となる。これを本論文の第二の目的としている。</p> <p>これらの目的を明らかにするために、本論文は次のような構成からまとめられた。序章では、上記の問いについて心理臨床実践経験をもとにして述べられ、第1章で、自閉症スペクトラムの概念について、その歴史的変遷と現代における心理的支援、及びプレイセラピーについて概観し、先述の象徴形成の前提となる分離性と身体像の観点を示して本研究の目的をまとめている。第2章では、象徴形成と分離性との関連について述べ、分離性の観点から自閉症スペクトラムの子どもの状態像を捉え、彼らの体験について、心理臨床事例から考察をおこなった。それによって外界のものが存在の拠りどころであり、それが変化したり欠けていたりすると、自己が崩れ壊れてしまうような恐怖となる。そして彼らは自らの体験を情緒的に心的なものとして体験することが困難であり、意味づけされる以前のそれそのものとして、感覚的に体験している。最後に外界のものの影響をそのままに受け、外的な事象が自己と等価視されて身体的感覚として感じられることが考察された。続く第3章では、象徴形成の基盤となる身体像の形成と時空間軸、および身体像の観点から捉えたプレイセラピーにおける着眼点とあり方について、先行研究や当事者研究、心理臨床実践事例から検討された。そこから、自閉症スペクトラムの子どもは、身体感覚が捉えにくく自己感覚をもちにくいいため、心的に意味づけて返してもらおうという人とのやりとりを通して、身体感覚が実感され、感覚体験が意味をもって捉えられると理解できる。</p>			

(続紙 2)

次に彼らは、全体としての身体像が形成されておらず断片化しており、まとまりを維持しようと、ものの表層にしがみついていると考えられる。従ってものの表層ではなく、人によってひきつけられ抱えられまとめられることが必要である。第3に、人の気配・ふるまい・表情・視線などを身体的に感じ、そこに意味を感じとる間身体性に開かれる、すなわち、身体における人との相互性に開かれることが必要である。第4に、鏡像が見られている自分の姿であることを子どもが理解し、その鏡像に同一化すること。その際、他者が鏡像になることである。

第4章では、自閉症スペクトラムの男児の事例を提示し、プレイセラピーを通して分離性(他者性)に気づき、身体像や時空間軸が生成されうることを考察した。本事例において、セラピストのインパクトある言葉の投げかけが、物と一体化していた男児の状態に切れ目を入れ、関心をセラピストに向ける契機となり、分けつなぐものとして機能した。またこの男児にとって、数がセラピストとの関係において意味をもつようになり、そこからセラピストとの分離性を認識していった。さらに、分離にかかわる時間や来所日から数に動きと広がりを見て取り、時間軸が生成された。第5章では、自閉症スペクトラムではない子どもの事例においても、表層を抛りどころにして生きている場合があることを示し、そのような状態からいかに人とつながり、自分の心を取り戻し、内側からの成長がなされるのかというモデルを提示している。プレイセラピーの中で、セラピストの言葉かけで、万能的な高みから地に「落下」した男児は、表層からの分離を経験した。ここではじめて“不在”の存在に気づき、人とのつながりを求めたのである。そして関心は表層ではない内部にシフトしていった。さらに自己の体験をセラピストにも体験させることによって、身体的体験と共に自己を対象化して納めている。このプロセスは心的世界の体験であり、心の内に抛りどころをもつ自己が生成されるプロセスであったと考えられた。

第6章「総合的考察」では、主に4章と5章の事例をもとにして、人との情緒的なつながりを基盤とするのではなく、外界のものの表層との関係において生きてきた子どもにとって、プレイセラピーでのセラピストと生きた関係が生まれることを目指すことが重要であることを示した。子どもがセラピストに関心をもち関係が生じてきた時、今まで抛りどころとしていた表層との間に揺らぎが生じ、隙間が生まれ、分離が起こって「落ちる」という感覚体験になる。ここでセラピストは、子どもを抱え、子どもの対象となる存在という重要な意味を持つ。子どもは今まで抛りどころとしていたものが“ない”ことに気づき、セラピストを見出し、目には見えない心的なつながりに目覚め、求めるのである。これらを通して心の空間や心的世界が生成され、そのプロセスにおいて象徴が生まれると考察された。最後に自閉症スペクトラムの子どもは、人を求めつなごうとする力が生来的に弱い。それゆえにこそ、彼らにとってひきつけられるような存在にセラピストになる必要があると本論文は主張する。終章では、今後の課題について述べ、全体をまとめている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、自己の生成とはいったいどのようなプロセスでなされていくのか、といった問いについて、極めて原初的な形で立ち現れる、自閉症スペクトラムの子どもとのプレイセラピーでの体験をもとに、論じたものである。彼らの治療や心理的支援においては、様々なアプローチの広がりを見せており、プレイセラピー以外の感覚統合訓練などによって、その身体感覚の発達を促進させるようなかかわりも盛んになってきている。ここでは、セラピストとの関係性によって身体感覚を感じ、心的に意味づけられることに重要な意味を見いだす、プレイセラピーの有効性をあらためて主張する。特に、自閉症スペクトラムの子どもたちは、これまで人との情緒的なつながりを基盤とするのではなく、外界のものの表層との関係において生きてきたという考えに基づき、子どもたちにとって、プレイセラピーでのセラピストと生きた関係が生まれることを目指すことを重視している。そこで、本論文のオリジナルである、次のような視点を強調する。プレイルームという守られた空間の中でのプレイセラピーにおいて、子どもがセラピストに関心を持ち関係が生じてきた時、今まで拠りどころとしていた表層との間に揺らぎが生じ隙間が生まれ、分離が起こって「落ちる」という感覚体験になる。ここでセラピストは、子どもを抱え子どもの対象となる存在であり、子どもの自己の生成に大きな役割を果たすという。これまで理論的、仮説的に述べられてきたことを、当事者研究や心理臨床実践体験に照らして丁寧に考察されていき、検証されていった論文であり、自閉症スペクトラムの治療における重要な提言をしていると評価できる。

論文前半部分では、自閉症スペクトラム概念とその支援の在り方について、歴史的変遷をもとに概観されている。その中で「象徴形成の問題」にふれ、自閉症スペクトラムの子どもは象徴的に表現すること自体が難しいことに着目する。象徴形成が可能となるためには、意味づける主体と象徴されるもの、象徴との分化ということが前提となり、それらが全体として捉えられていることが重要となる。分離性という視点においては、ポストクライン派のTustinが、自閉症の子どもたちの事例から「落ちる」という体験を記述したものを捉え、本論文では、プレイセラピーにおける「落下」による分離体験から、セラピストという生きた人間との関係性を求めて、心的なつながりに目覚めていく視点を示している。さらにその状況の中で、彼らを引きつけ、彼らが心的に感じるができない感覚を、セラピストが情緒的に心的に感じ、抱え考えて返すことの重要性を説く。また身体像とプレイセラピーとして、当事者研究の語りによる「身体として実感が持てない感覚」や、他者の気配・表情・視線・ふるまいなどを身体的に感じ、そこに意味を感じ取る間身体性にも触れながら、さらに著者の心理臨床事例から身体像形成のプロセスを論じている。また論文の構成としても、先行研究のみが羅列され、その心理臨床素材による裏付けは、後半部分に委ねられることが多い中、本論文では、先行研究に基づく問題点やその整理に、著者自身の心理臨床事例による体験を交え、生き生きと語っているという特徴がある。このことは、著者自身が子どもとの心理療法における豊富な体験を持っていること、そして優れた感覚を備

(続紙 4)

えていることの証である。

後半に続く事例では、最初に自閉症スペクトラムの子どもとのプレイセラピーでの体験から、分離性に気づき身体像や時空間軸が生成されていく過程を論じる。10年を超えるかかわりにおいて、様々な視点からの考察が可能であろうが、論点を絞って独自の視点で見直し、「落下」体験の意味づけをおこなっている。次章では、自閉症スペクトラムの子どもとは異なり、もともと三次元的心的空間を持ち、人とかかわりを求める事例を取り上げ、本論文で主張する自己の生成について、さらに多角的に論を進める素材としている。そこでは、「落ちる」体験が「ない」ことを気づかせ、セラピストを求める体験につながっている。これらの事例を中核として、前半部分で引用した事例群や当事者研究も含め、総合的考察を進めている。また、プレイルームにおけるセラピストの機能として、これらの子どもたちが体験する「落下」を抱え、彼らとセラピストの片方だけが生き残り、片方が不在になるような体験ではなく、共に生きた個として在るということが重要と考察し、これらの問題を抱えた子どもたちのプレイセラピーにおける、多大な功績をもたらしたと評価できる。

なお、試問においては、本論におけるプレイルームの果たす役割や、身体像を形成する感覚における気配やふるまいといったことと、まなざしとの区別について疑問が出された。またこれらの子どもたちにとって「落下」が外傷体験となるのかどうか、「落下」はプレイセラピーのみで起こりうる体験なのか、などといった指摘や議論が交わされた。しかしそれらの議論は、自閉症スペクトラムの理解とその援助に対する極めて重要な課題に触れている、本論文のテーマから生まれてきたものであり、著者の心理臨床実践によって、さらに今後明らかにすべき課題が明確になったものである。それゆえ、それらの議論が本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成24年5月9日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：                    年            月            日以降